

〈研究ノート〉 立正安国論に学ぶ

災難の実体を知る―聖人の経証主義

〈第二問答〉

第二問答の概略

調査主任 久住謙是

第二問答は、本書の主題が明らかにされた第一問答を受けて、その問題解決に経文の証拠を列举して答える段となっている。

すなわち、本書の冒頭の「旅客来つて嘆いて曰く、近年より近日に至るまで、天変・地天・飢饉・疫癘、遍く天下に満ち、廣く地上に迸る」という現実の災害に対して、主人は国に正しい仏法が行われず、邪な信仰が横行しているからである」と答えるのである。

この答えを聞いた客は、しからば、いつれの經典にその証拠があるのかと主人に問い、主人が四経の六文を引証してこれに答える。

第一問答が、本書の主題の提示、現実の現象を描き、主人と客が悲惨な状況を共に嘆き、どうすればこの災害を免れ得るか共通の認識を確認して、第二問答で、その災害の興起する所以を四経に拠り結論を示すのである。第一、第二問答は本書の序論の問答で全体像をあらかじめ表出した構成となっている。

第二問答は、何よりも第一問答から導びかれた上での經文の列挙に占められている。いま少しく、第二問答の經文の出される第一問答の文脈を遡及してみると、

「主人曰く、独り此の事を愁へて胸臆に憤悱」する思いから、「聊か經文を披きたるに、世皆正に背き、人悉く惡に帰す。故に、善神は国を捨てて相去り、聖人は所を辞して還らず、是を以て、魔來り鬼來り、災起り難起る」と、災害の続起は、直接的には惡魔・惡鬼が原因であり、そのような状況をつくり上げた根本、惡鬼の跳梁をゆるし現出せしめているのは今の世の人々が正しい信仰に背き、邪信にはしっている元凶にある。それ故に、守護の善神。聖人が所を辞去してしまった結果であると指摘した。そして第二問答へと移るのである。

「客曰く、天下の災、国中の難、余独りのみ嘆くに非ず、衆皆悲しめり。今、蘭室に入つて、初めて芳詞を承るに、神聖去り辞し、災難並び起るとは、何れの經に出でたる哉。其の証拠を聞かん。」

第一問答の主人の断定を、客が再び言葉をくり返した上で、そのような災難の続出は、どのような經典に明言されるのか、直接の經証を求めるによつて、「主人曰く、其の文、繁多にして、其の証弘博なり」と述べて、金光明經一文、大集經二文、仁王經二文・藥師經一文を選択し、第一問答末文の設問に答えてゆく。

金光明經は、国に正法が行われないために国に災禍を招く善神捨国が説かれ、大集經の二文は、それぞれ、不安と恐怖が充滿する法滅の危機意識、末法の様相を示すと共に、そうした状況下で、飢饉・戦乱・疫病の三災の起ることを指摘する。

仁王經の二文は、はじめに、国に正法が行われなくなると、まず鬼神が乱れ、天地の変異が起る。聖人はその国を捨て去るとき七難が起るとし、第二文に七難の各難を挙げている。藥師經は、仁王經の七難と共に、この經所説の七難を

並び挙げている。

以上の経文をふまえて、主人は、

「夫れ、四経の文朗あきらかなり。万民誰か疑はん。而るに盲瞽もろこの輩、迷惑の人、妄りに邪説を信じて、正教を弁へず。故に天下世上、諸仏衆経に於て、捨離の心を生じて、擁護の志無し。仍つて、善神・聖人、国を捨て所を去る。是を以て、悪鬼・外道、災を成し難を致す。」と、主人の立場を、経証を受けて答釈し、もう一度再説して結んでいる。その中に、世の多くの人々は、仏や経を捨てて顧みないとし、弥陀一仏帰依の浄土教批判がこめられている。

以上で、第二問答が結ばれている。

第二問答の問題点

第一問答を答釈し結論づけた経証は、鎮護国家的思想にうらづけられた護国思想の強い經典であり、国王以下人々に正法が崇重されていない結果の災難、七難の列挙は、第九問答にいたって、再説して、自界叛逆と他国侵逼の二難が、未だ起つておらず、その興起を予言することとなる。

この二難の予言は、聖人の法華経の行者実践に新たな展開を促し、立正安国論が予言の書と言われる側面を与え、四経の経証した災難観は、聖人の宗教的深化にしたがつて、人々の苦悩をもたらす災害の表裏の関係としてこの現実の苦悩濁世を救済する法と人の出現が待望されるその瑞相と領解されるように思想的展開の軌跡をえがく。

第二問答は、その端著であり、災難にもとづく行動を起さしめた根拠を明示したところと言えるのではなからうか。さらに、聖人の経文第一、経証主義の立場が示されている。

釈尊の金口、直説である経文を第一の拠りどころとする行動規範は、仏者の共通するところであらう。しかし、当時、

經より論釈書・先師高德の言に規範を求める浄土教や、經の優位を否定する印と真言を強張する真言や、不立文字の禪の立場を考えると、一貫して經々に釈尊の生きた言葉をきき、釈尊の告勅を經に尋ね、真実經の究明により真の救済が保証される把握こそが第一に優先されるべきことを主張した聖人の姿勢は、当然でありつつ、それが当時からえりみられなかった仏教界の状況こそ、聖人が諸宗を邪な仏法と批判してやまなかった立場が明確にされる。法華經の正法をもつて諸經（教）を破折し、法華經の正法が打ち立てられ顕正するとき、諸經はこれを補い支える役割を担うものであるとする立場である。

立正安国論は、いわれるように破邪論であり、立正たる法華一乘の顕説高揚はみられない。法華經至上主義の立場から、何が正であり、何が邪であるか、邪教・邪信に対する究明が、必然的に災難の因由をあきらかにしてゆく經説こそ、万象を証明すると確信する立場が第二問答の背景にある。

聖人の經証主義は生涯一貫して変らないものであり、立正安国論上書を契機として、さらに法難がおよぶごとにこの姿勢は強められ、法華經の一字一句が、釈尊の真実仏語として、心に聞き、身に読んで、法華經の行者の是非を問ひ、行者意識の自覚を深められていることは知られているところである。

この視点から、第二問答は、本書の結びである「速やかに実乗の一善に帰せよ」と誠言された真実法華經の立場から、論釈に依らず、權經に依らず、真実の依法不依人の經証主義を背景として、四經の經証が示されているといえるのであるのか。

さらにまた、引用された四經についてみると、聖人が正依とする法華經は、古代から鎮護国家の經典として崇重されてきたが、現実の天災・地天に方策を提示しうる説相はなく、その意味で、金光明經・仁王經などは鎮護国家性を帯びて伝統的に尊重されてきた上に具体的解答を与える内容を具えている。大集經は、正しく法滅のとき末法の姿を顕説

する説得性を保持し、薬師経・仁王経の七難と大集経の三災の説示は、正法違背、惡法信受の報果として天地自然の惡環境に翻弄される人間の生の極限を鮮やかに地獄絵図を見せるように縷説する經典である。

聖人が体験し、まのあたりにした「正嘉元年八月廿三日戌亥の時、前代に超えたる大地震、同年八月一日大風、同三年大飢饉、正元元年大疫病、同二年四季に互^ひりて大疫已^やまず」〔安国論御勘由來〕定遺四二一〕鎌倉は、地震・飢饉・疫病などによる死者・罹災者にあふれ、本書冒頭の「牛馬巷に斃れ、骸骨路に充てり。死を招くの輩、既に大半に超え」る現實は正しく前記経々所説の再現と見てとれたであらう。

それは、仏者としての聖人にとって災害による多数の犠牲者の目撃は強烈な印象を与えたに違いなく、法華経の理想とする成仏の世界、仏国土の実現は、社会・国家の安穩なくしてはあり得えない。多くの人びとの苦しみを共感し、これへの脱却救済が、使命として自覚されたとき、解決の方法論として諸経に目を凝らし、一切経を閲読したと伝えられる行動の契機を与え、その結果として、眼前の現象から、正法違背——惡法帰依——善神捨国・聖人辞所——惡魔・惡鬼横行——災難興起という連関が示され、逆に災難を招くことは、根本的には人間の當為に起因していること、何よりも人々の信仰姿勢が問われることを結論づけることによつて災害の実像を見ようとした聖人は、ある意味で、当時の中世的仏教的災害観として共通して把えられる面がある。

しかし、聖人はそれを持ち越えた聖人独自の行動意識があつたといえよう。それは現實の災害苦を誰よりも凝視していった点を見逃すわけにゆかないのである。

当時の鎌倉の災害を、京都で伝え聞いた親鸞は「ただし、生死無常のことは、くはしく如来のときをかせおはしましてさふろふうへは、おどろきおはしめすべからずさふろふ……」〔末灯抄〕と、書き送っている。高齢であり、災害地から遠く離れているということも考慮されるにしても、聖人の「独り此事を愁いて胸臆に憤悱す……円覆^{えんぷ}を仰いで恨を吞

み、方載に俯して慮を深くす」とは、大きな隔たりを感じる。聖人は、何よりも、現実の苦しみを忌避することなく、みづからも人びとの苦しみの中に置き、苦を共有しつつ、その苦を解決するために、生死無常の道理をうそぶいて悟り顔に諦観した、拱手傍観する態度ではなく、つねに人々の苦悩の現場に降り立ち、共に苦しみつつ、生身の肌にふれる感性的な苦悩を実感重視する姿が、だれよりも聖人にはあったと思われる。

立正安国論、それにさきだつ、守護国家論などの御書は、現場の生の苦悩を共受したものが、その苦の克服をめざすことで一貫しており、やむにやまれぬ、この行動が、聖人の生涯を決定づける方向へと展開してゆくのである。

いとしき息子と死別する女性の涙に、凡夫性を露にして共に涙する晩年の身延期の聖人にもその跡を見届けることができる。

法華経という絶対的教権のきびしさを具えつつ、教条主義に陥入らず、何よりも、この世の生を大切にされた聖人の「一切衆生の同一の苦を受けるは、日蓮一人の苦なり」(『諫曉八幡抄』(定遺一八四七))と示された姿勢が第二問答にも貫かれていると思われる。